

【原著】

「森のようちえん」の理念と研究課題

杉 山 浩 之

Concepts of Waldkindergarten (Kindergarten in the Forest)
and Tasks of the Research

Hiroyuki Sugiyama

はじめに～「森のようちえん」の胎動～

20世紀後半からヨーロッパで始まった「森のようちえん」、その魅力は、「自分の感性と知性が自由に発揮できること」と「自然の中に秘めた不思議さとの出会いと好奇心が満たされる自然の豊かさ」にあるのではないだろうか。

最近、日本各地でも「森のようちえん」は急速に広がりつつある。「森のようちえん」全国ネットワーク会長の内田幸一によると、現在、日本には200近くの森のようちえんが存在するだろうということである。正確な数はつかめていないが、毎年、新たに誕生しているとのことである。その正確な数は、この全国ネットワークに加盟しなければ分からず、何らかの組織に登録をしなければ数は把握できない。それは日本の森のようちえんが無認可であるからである。

「森のようちえん」は、20世紀の後半を過ぎた70年代、スウェーデンから移入されたデンマークで広がり、公立の認可施設となっていくた。さらにドイツでは民営施設として認可され、人件費などが公費で補助されている。隣国の韓国においても2012年から認可が始まっている。しかし日本では認可されていない。この違いからは、異なる保育観というものを感じさせられる。学校教育においても教育方法がかなり異なるヨーロッパと日本では、もっと深いところで異なる教育思想を持っているのかもしれない。「森のようちえん」の認可ということから、教育や文化について様々な事もまた見えてくる。韓国の教育はいわゆるアジア型であると思われるが、受験ストレスや不登校など青少年の生活実態への危機感、さらに青少年の自然体験活動施設が日本ほど多くないことなどが認可という方向を後押ししたようである。

以上のように、「森のようちえん」という文化には、まだ気付かない可能性や教育の発展性が大いに秘められているように感じる。さらに「森のようちえん」は、日本の保育思想を発展させる可能性を持つということからも研究の価値があると感じている。このことから、次のような研究目的を設定した。

- 研究の目的
- (1) 「森のようちえん」の理念や本質を明らかにすること
 - (2) 「森のようちえん」の研究上の課題を整理すること
 - (3) 国内外の「森のようちえん」の実際の様子を視察し、教育価値・成果や教育的・経営的課題を明らかにすること
 - (4) 「森のようちえん」のあるべき姿を提言すること

現段階では、以上の4点を研究の目的としている。現在、民間の組織から委託研究を受けて進めているが、そこでは、目的の4「森のようちえん」のあるべき姿を提言することを最終目標としている。

そして、今の段階、つまり本論文は、以下のことを目的としている。

- I 「森のようちえん」の理念の整理
- II 「森のようちえん」の研究上の課題の整理

I 「森のようちえん」の理念

(1) 「森のようちえん」の定義

全国「森のようちえん」ネットワークでは、「森のようちえん」を以下のように定義している。(文献①)

「自然体験活動を基礎にした子育て・保育、乳児・幼少期教育の総称」であり、「森は、海や川や野山、里山、畑、都市公園など、広義に捉えた自然体験をするフィールドを指す。」
「ようちえんは、幼稚園だけでなく、保育園、託児所、学童保育、自主保育、自然学校、育児サークル、子育てサロン・ひろば等が含まれ、そこに通う0歳からおおむね7歳ぐらいまでの乳児・幼少期の子どもたちを対象とした自然体験活動を指す。」

同ネットワークでは、この定義は、ドイツや北欧とは気候や風土が異なる日本の状況に合わせた定義であるということである。そして、日本の「森のようちえん」は、子ども10人程度の小規模な育児サークル的な活動から、認可幼稚園・保育園の活動（例えば、週半日から1日を森で過ごす）、さらにはNPO法人の自然活動団体の幼児向けプログラムまで範囲は広い。したがって、森のようちえんに関わる大人は、自主保育指導者（資格免許は問わない）やボランティア保護者から野外活動指導者、幼稚園教諭や保育士まで幅が広いことになる。「ようちえん」としているのは、幼児の集まる場のイメージとして「ほいくえん」よりも適切であるという考えがある。(文献①)

ここには、日本的な「森のようちえん」観があるように思われる。諸外国の「森のようちえん」の実際を十分に見たわけではないが、どちらかという急峻な山地が多い日本という地理的条件の違いから、森に限定せず、自然環境という広い視野でとらえることのメリットがある。つまりネットワークとしては広く定義することで「森のようちえん」の広がり期待していることが伺える。いまのところ、ヨーロッパにおいての定義はまだ不明であるが、捉え方に違いがあるかもしれない。

(2) 歴史的背景と保育ニーズ

デンマークにおける「森のようちえん」は、1970年代、一人の母親から始まったようである。すなわち、一人の母親が自分の子どもが通える範囲のなかで、どの幼稚園に入れるかを見定めた結果、魅力的な保育がないという保育への不満から誕生したのである。そして、自然環境の中での保育というニーズは潜在的に高まっていたようで、次から次へと入園者があり、やがて急速に全国へと広がっていった。そして、公立幼稚園を中心にした行政のバックアップで安定した経営が実現している。一方、森と湖の国スウェーデンでは、豊かな自然に囲まれた環境のもと環境教育の発想から文字通り自然に「森のようちえん」が認可され、展開して行った。さ

らにドイツでは、デンマークの影響を受けて広がり、やがて認可の道を辿った。ドイツの特徴は、民営を中心に認可され、全国的に広がっていることである。そして隣国のスイスにも民営による森のようちえんが設置され始めている。その他のヨーロッパやアメリカ大陸にも少しずつであるが活動が始まっている。

このように高度な文明社会が進展した20世紀末において、自然回帰現象が保育界にも訪れたと言ってよいのではないか。ドイツの幼稚園創始者フレーベルは森の隣に幼稚園を設立したようである。フレーベルの先達ルソーは「自然に還れ」という言葉を歴史に刻んだ。感性の敏感期である幼児期は、とりわけ自然環境とかかわることは重要である。今日の保育は、ともすれば知的側面や技能的側面への偏りがある。そうした保育への警鐘として「森のようちえん」は誕生したのではないだろうか。

(3) ドイツの一つの「森のようちえん」(Ramona Marx 主宰, Wald-Kreativ-Kindergarten)のホームページ(文献②)

筆者は、2013年9月にヨーロッパ(ミュンヘン・バイエルン州・スイス北部)の森のようちえんを視察した。詳細は、今後にまとめるが、その一つの森のようちえんのホームページ(一部)を資料として本論文の末尾に紹介する。

ここで特筆すべき点は、以下のとおりである。()による付記は、今回の視察による成果の一部である。

- ① 「森のようちえん」のイニシエーター、すなわち園長 Ramona Marx さんは、子どもの発達を助長する高度な専門性を有しているということである。(認可を受けるためには資格を持つ保育者が配置されねばならない。)
- ② 子どもの創造性をリスペクト(尊重)する、つまり、子どもの可能性を信頼する、それは創造性を中核とするということである。様々な活動を通して創造性を育てることが重視されている。(保育者は、基本的に見守ることを中心に必要な応じた個別的・全体的援助を行う。また、プロジェクト学習などのテーマ活動の提案を行うこともある。)
- ③ 森の活動、それぞれの専門家呼び、自然の理解を助長しているということ。中途半端な理解には止めないということであろう。(ドイツ・スイスでは、専門知識と資格をもつ森の管理人が市民の森を管理しているが、子どもたちは森の管理人から多くのことを学ぶようである。)
- ④ 保護者の経営参画が「森のようちえん」を支えていること。(NPO 法人が多く、保護者のボランティア参加によって保育および経営が成り立っていることもある。)
- ⑤ 教えることはしないが、質問には詳細に答えるということがあり、そのために専門家が必要とされている。
- ⑥ 音楽活動や劇活動、造形活動が保育者の計画により取り組まれていること。(認可条件に含まれていることがある。)
- ⑦ 森の中での活動の前提として、ルール(規範)を守ることが重要であること。(昆虫や植物など自然の生き物は観察にとどめて取ってはいけないとか、許可されていないものは食べてはいけないこと、また、行動範囲は笛で奏でる音楽が聞こえる範囲とすることなど)
- ⑧ 小学校教育への適応ということも考慮しているということ。(言語活動、算数活動、集団活動などが行われている。)

(4) ドイツの「森のようちえん」(Hee-Jung Chang の調査研究, 文献③)

韓国の Chang (張) 女史は、ドイツ・スイス・日本・韓国の森のようちえんを比較調査した成果をまとめている。その成果によれば、森のようちえんの基本的活動は、「①朝の集い、②おやつ(朝の間食)、③自由時間、④まとめの集い」となっている。さらに、プロジェクト活動が入る場合は、朝食は自由時間とプロジェクト活動に挟まれることになるそうである。

朝の集いでは、歌やリズム遊びをしたり、これまでの協同活動や週末の経験を話したりする。さらに、その日の遊びについて話し合ったり、提案したりしてから一日を始める。週五日で四つの遊び場を子どもたちが決めている園もある。自由遊びでは、自然を素材とした遊びを中心に、道具や虫メガネ、ナイフ、水彩絵の具、色紙、図鑑などを利用した遊びが展開する。プロジェクト活動には、探究遊び、身体遊び、知覚遊び、造型遊び、読み聞かせ、演劇、遠足、お祭り、誕生祝い、自然素材の観察と理解など盛りだくさんである。まとめの活動は、一日を振り返り、歌いながら、友だちと森に別れを告げる。

また、一週間のスケジュールが設定されている場合も多いようである。

月曜日<森の散歩>
火曜日<年齢ごとに童話を読む>
水曜日<道具遊び, 探究の日>
木曜日<食べ物作り>
金曜日<楽器遊び>

森での活動では、危機管理や健康管理は重要である。子どもたちは、次の約束を守らねばならない。

<教師の声が聞こえたら、教師が見える所で活動する>(あるいは、楽器による音楽の聞こえる範囲)
<木の実を子どもの判断では食べない>(許可されるものは除く)
<食事の前にはいつも手を洗う>(スイスでは、泥がついていなければ洗わない園もある)
<信号・鐘が鳴れば直ちに教師のいる所に集まる>(音楽性のないホイッスルによるものではない)
<道路を渡るときには周りを良く見てから渡る>(ただし、整列して進行して行くことはない)

健康管理に関しては、当然、免疫力が強化され、心身ともに安定するが、そのためには、適切な服装があり、体温調節のための重ね着が基本となる。玉ネギのように着るというらしいが、長ズボンと長そで、靴下と堅い靴、虫除けを塗る、吸血ダニ対策としての脳膜炎と破傷風の予防接種を受けること、虫除けのために炭酸や糖分の入った飲み物は禁止などの約束事がある。

天候異変(年齢や発達によるが年長児は零下5°C程度なら屋外活動やテント下となる)による避難小屋も認可の森のようちえんには必須要件である。20人程度の子どもと数人の大人が入るコンテナが通例である。もちろん、内部には遊び道具や教具がある。コンテナは、季節ごとに自然環境にマッチした色に塗りかえられることもある。避難小屋から少し離れた場所に自然のトイレが作られ、排泄物も自然の循環の中で資源となることを身を持って学ぶ。避難小屋は二つ持つ場合もある。

朝の集いなどの集まりは、丸太のソファが円形に並べられた場所で行われ、大抵は避難小屋の近くにある。森の静けさを感じながら自分自身を見つける子どもたちの憩いの場所である。森のソファの近くには、大小の石を敷いて作った「約束の土地」（キリスト教で神から与えられた平和の土地のこと）がある。間食の際に、音楽が聞こえると集まる場所である。

森の活動では、探究ノートに観察したり探索したりしたことをストーリーや絵で記録する。人間の原初的な自然的行為である道具を使った活動<木彫り>も体験する。言語能力と感情を表現する演劇も重要なプロジェクト遊びである。様々な活動を通して、子どもたちは、お互いの意思疎通が必要であることを知り、自分の能力を知り、暮らしに必要なことを知り、他者を尊重することを知り、協同過程を身につけるのである。そして失敗しながら身につけた経験は新しい知恵を生み出すのである。

(5) 韓国における「森のようちえん」の認可の背景

韓国では、2012年7月に「森林教育の活性化のための法律」（2013年改訂）を制定し、「森のようちえん」を認可し始めた。韓国では、幼少期からの受験競争が激しいうえに、都市ではマンション暮らしが多く、子どもたちはストレスが多く、日本と同じように特に中高生に不登校が多いようである。日本と比べると、自然体験活動の組織が少ないために、この法律によって、乳幼児から青少年の健全育成を図っている。

筆者は、2013年5月1～3日にソウル市内の森のようちえんを見学する機会を得た。

① 小学校低学年の「森の教室（森林教育）」

5月1日、ソウル市内の小学校1～3年対象の森の教室を視察した。韓国では水曜日の午後は学校がない。都会生活と受験体制の中で過大なストレスを抱え、人間関係の希薄な子どもたちを治療する効果が、森の教室で検証されているようである。韓国では、森林教育に精神的な癒しも大いに期待している。韓国は3月が新学期であるが、二つの学校から集まった子どもたちが未だ一緒に協力して活動できないことが課題のようである。

② 「森のようちえん」シンポジウム

5月2日は、幼児教育から大学にいたる環境教育の充実に向けた「森林教育の活性化のための法律」が施行される中でのシンポジウム（国会議員会館、幼稚園関係者や保護者も参加）に出席した。「森のようちえん」の運営にボランティアとして参画する保護者たちも大勢参加し、政策への期待が大きいことを熱気から感じる事ができた。

③ 「森のようちえん」の視察

5月3日は、「森のようちえん」を二つ視察した。ソウル市内の小さな自主保育型（15人の子どもと3人の保育者）とソウル市南部の農場幼稚園である。韓国には障害児中心の「森のようちえん」もあるが、それは次回となった。今回、認可の方向で動き出した韓国では「森のようちえん」が急速に広まってしまうと思われる。子どもの成長に危機感を持っている韓国では、「森のようちえん」の専門家養成（大卒後の半年コース）の計画も進むことになっている。これに合わせて学術的な研究もさらに進むであろう。すでに、ドイツの専門家を招いての国際フォーラムが頻繁に行われている。

(6) 日本における「森のようちえん」創始者、内田幸一氏（飯綱高原子どもの森幼稚園の主宰者）が提唱している「森のようちえん」の理念（文献④）

内田氏の「森のようちえん」の理念は幅広く深いものがあるが、その中から主なものを次に挙げてみる。

「森のようちえん」の運営形態には、自主保育型、共同保育型、主宰者型保育がある。図1にあるように基本的に「認可外施設」であるが、まだ専門家がいないうちをもちつ数人の母親たちが始める自主運営のスタート型の自主保育型、母親たちの共同運営で保育専門家を雇って行う共同保育型、専門性のある園長などの主宰者が運営する主宰者型がある。図1（別紙、巻末）参照。

主宰者型になると保育の質も一層向上していくであろう。ただ、共同保育型に見られる保護者の経営参画は古くて新しい経営手法である。保育者と保護者の共同保育は、いわゆる「お任せの保育」ではなく、保護者や子どものニーズが常に反映されるものとなるであろう。保護者の経営参画の時間的ゆとりや経営参画という意欲にも左右される。主宰者型は、保護者に経営参画のゆとりがない場合に適切なものとなる。

内田氏は、長年の実践および研究から「保育活動連携樹」（図2）を作成している。これを一瞥すると、一瞬かつての六領域かと誤解するが、「言葉（言語）」の替りに「栽培・食」が入っている。言語活動は、表現活動の一つでもある。そして人間生活の基盤に言語活動があることから、敢えて設定から外していることが分かる。逆に見れば、「言葉（言語）」を独立させることが、手段としての言語を特化して教える保育になる危険もあるから、生活の中で言語を修得するという考え方で保育を捉えていることが分かる。全体的に見れば、「森のようちえん」の活動では、5領域の活動が展開できるということを示している。図2（別紙、巻末）参照。

さらに、同様に内田氏の「森のようちえんにおける保育活動の構造的な理解」（図3）によって、自然体験から始まる活動の深まりとともに、多様な領域との関連が見えてくる。図3（別紙、巻末）参照。

(7) 一研究者の「森のようちえん」の見方～友定啓子氏の分析～

友定啓子氏（文献⑤）は、「森のようちえん」を保育「人間関係」の視点から分析している。筆者は、同氏の論文から以下の点をポイントとして取りだした。

- ・「人と関わる力」を育む「森のようちえん」
- ・「イメージの宝庫」としての森は、「自然の造形の豊饒さが想像の豊かさ」を育む
- ・「動態としての森」を訪れる度に、子どもはそこに異なる姿を発見することで、「物語を作りながら世界を理解」する
- ・森での遊びは「偶発的な状況の連続」であることから、遊びを生み出し、子ども同士が相互に働きかける機会がとて多い
- ・会話が「プロジェクト型」で「協同的な活動」を生み出す

友定氏は、「森のようちえん」での活動が「人とかかわる」力を子どもたちに形成することを発見し、その形成過程を分析している。「人とかかわる」力の根底には、自然の造形の豊かさや変化の動きの中で養われる「想像力」が、人とかかわるときに発揮されると述べている。さらに、自然の中での偶然に生まれる遊びの中で子どもたちが相互にかかわり、問題設定や解決を探究するプロジェクト型の活動において協同することで「人とかかわる」力が養われると述べている。

(8) 保育学会における取組み

日本における諸学会において「森のようちえん」がどのように議論されているかの動向は把

握できていないが、最近では日本保育学会で発表や討議が行われている。その他、環境教育関係の学会でも行われているであろう。

2013年度福岡で開催された大会では、①発達障害児は身体バランス能力が低いことが多く、野外保育の中で自信を持つと精神的な成長があること、②オーストラリアでは「子どもは将来の大人になる市民の一人である」という発想から環境保全の教育（ESD）を取り組んでいること、③北海道から沖縄まで「森のようちえん」の活動は展開していること。④歴史的に見ると数十年にわたり、認可保育園・幼稚園においても、広い農地や森の中での保育活動が展開されてきた経緯があること。

(9) 「森のようちえん」の構成要素

これまでの研究から「森のようちえん」の構成要素として、「環境」「活動」「保育者」が浮かび上がる。

① 「環境」

地域性を生かした、身近な自然の中での保育を中心とする保育であり、気候や風土が異なる地域性というもの、それぞれの「森のようちえん」の独自性を具現化するものとなる。季節の移り変わりによる環境の変化や生態系の変化に気付き、また、子ども自身も環境に適応するという同じ波長を持つものとなる。（今回の視察した一園では、マイナス10度近くまでは外で活動するということであった。気温に合わせた身体の動かし方を工夫することで体の中のエネルギーを引き出す保育が行われていた。プラス10度を少し超えた9月新学期慣れない寒さで震えていた子どもに気付き、身体を動かし走ったり、太陽光のある場所に移動したりする援助を行う場面に出会った。広い環境を利用して、森の入口である集合場所からは歩いて1～2キロ程度先に活動場所が点在しているケースが多かった。全員集合して朝の挨拶や活動確認、歩く走るなど自由に移動して集合してお話を聞いたり活動したりして、再び次の目的地に自由に移動して活動というパターンが多かった。）

② 「活動」

上のことから、環境を生かした活動プログラムが生まれる。季節や天候にあった活動を子どもたちが展開しているか、創造性豊かに活動しているか、一人ひとりの発達過程にあった活動となっているかなど、成長を保障する活動となっているかが大切である。（今回の視察では、幼児20人前後で3～4人の保育者がおり、一人ひとりをしっかりと見守る余裕が与えられていた。落ちている自然の木や葉っぱを使った造型活動、プロジェクト型の活動、泥だんごを作る、花の蜜を吸う、提供されたゲームをしながら計画的に数の学習をする活動もあった。森の活動の始まりと終わりは、歌の表現活動が必ず行われていた。）

③ 「保育者」

自然の中に連れて行き、様々な体験を提供することが保育者の役割となる。もちろん、体験をどのように発展させ、深めていくかが重要である。主体的な遊びを見守り、共感し、援助することが保育者の役割の基本となる。時には、プロジェクト保育などで計画的に展開して行くこともある。そこでも、可能性を引き出す援助は基本となる。発見や気づきを広げたり、活動を深める発問もしたりする。何より、子どもを信頼できなければ、自然の教育力に任せることはできないであろう。（認可条件の中に言語・造形・音楽・算数などの学習活動が含まれており、保育者は自然な形で活動が展開するような工夫を計画している。図鑑や絵本を持ちこむこともあれば、妖精や動物を人形にして保育者たちが用意したストーリーを協働で展開することもあった。）

(10) 「森のようちえん」の教育的価値

最後に、「森のようちえん」の教育的価値として次のようにまとめられる。

- ① レイチェル・カーソンや宮沢賢治がともに強調するように、人が生きる上では「知性よりも感性」が重要である。特に幼児期は感性が発達する時期である。幼児期においては、自然への感性こそが重要である。自然を感覚的に受け止め、自然を柔軟に受け入れ、自己を変化させること、知識としてではなく、感覚的に自然の摂理や秩序を感受すること。このように、感覚の世界から自然と親しくなる、その後で徐々に科学的なことへと発展していくというプロセスがある。
- ② 自然の中で遊びを考え、とるべき行動を判断し、冒険や挑戦をすることで諸能力を発展させていく。「自然」と「自己」と「他者」の関係性の中で、自己の存在を確かめ、他者の必要性を知る。こうして、人間の個性化と社会化が達成されていく。自然の中に無駄は一切ない。自然の中にゴミもない。すべては生態系の中で必要とされている。人間社会もそうあるべきだと感得するであろう。自分を知ることが他者を知ることになり、また、自然を見直すことにもつながるであろう。

II 研究上の課題

これまでの研究から、今後の研究課題としては、以下のようなことが挙げられる。

(1) 諸外国の「森のようちえん」との比較の視点

「森のようちえん」の相対化・客観化により、それぞれの特徴・課題・改善点を明確化し、改善策を発見し、相互の「森のようちえん」の発展に寄与することができる。

比較の視点

- | | |
|------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|
| ① 教育目標やねらい | デイリー、季節、年 |
| ② 類型・型 | 自主保育型・共同保育型・主宰者型 |
| ③ 自然環境の条件と環境設定 | 森の選択基準（河川・池、樹木など） |
| ④ 活動の種類と保育内容領域
・一日の活動（流れ） | 四季に応じた活動、伝統的な生活文化の活動など
朝の会（歌、出席調べ、活動の確認、指導事項）…昼食…
帰りの会（活動の振り返り、反省、指導事項、歌） |
| ⑤ 保育者の役割 | 援助=かかわる=見守る・聴く・共感する・伝えるなど |
| ⑥ 制度的保障（財政） | 無認可型、NPO型、認可型 |
| ⑦ 保護者の負担費用と役割 | 保育料と経営参画 |
| ⑧ 危機管理、設備 | 避難用小屋（保育教材） |
| ⑨ 研修・研究 | 研修体制 |
| ⑩ 経営組織（責任者とスタッフ） | 校務分掌（役割分担） |
| ⑪ 各園の経緯と将来 | スタート、節目、認可時期、今後の課題と展望 |
| ⑫ 人数、移動範囲 | 適正規模（対保育者）、場所は固定的か？ |
| ⑬ 移動手段 | 集合から森の入口まで |
| ⑭ 自己評価 | 教育成果および組織運営の自己評価、自己評価の制度 |
| ⑮ 第三者評価 | 第三者評価の内容と制度 |

(2) 「森のようちえん」の二大条件

「森のようちえん」の構成要素は、子どもと自然環境と保育者である。そのうち、子どもにとっての教育環境（保育者・自然環境）をどのように準備するかということを研究する必要がある。

- ① 保育者の資質と能力
- ② 自然環境の原始性の条件

(3) 活動や教育効果の可能性

「森のようちえん」の活動をさらに詳細に把握し、教育効果の可能性を研究して行く必要がある。

- ① 「森のようちえん」の教育可能性
- ② 「健康・運動性」の発達
- ③ 「感性と知性」の発達
- ④ 「社会・人間関係力」の発達
- ⑤ 「自然遊び」とネイチャーゲーム
- ⑥ 「環境教育」～ESD, 再生エネルギー
- ⑦ 「生命」教育～植物（やさい）栽培・動物飼育
- ⑧ 「環境」絵本と森のようちえん
- ⑨ 「障害児」にとっての森のようちえん
- ⑩ 「多様な活動」を保障する自然環境
- ⑪ 「園庭」における森のようちえん
- ⑫ 「保育室」における森のようちえん

(4) 経営上の問題

現段階としては、以下のような経営上の問題が予想される。

- ① 「森のようちえん」の経営～運営組織とスタッフ～
- ② 「森のようちえん」に通う子どもの保護者の経営参画と保育観
- ③ 「森のようちえん」の園舎（避難小屋の環境整備）
- ④ 「森のようちえん」の財政
- ⑤ 「森のようちえん」の認可条件

お わ り に

「森のようちえん」は、ヨーロッパで誕生し、認可され発展してきた。この意味において、ヨーロッパの「森のようちえん」から学ばねばならないことは多いであろう。教育面と経営面の両面において参考にできるであろう。この両者の相互の関連性も見逃せないことである。一口にヨーロッパといっても、デンマーク、スウェーデン、ドイツ、スイスではまた「森のようちえん」の保育や運営が異なるのである。例えば、スイスでは、3歳の幼児から小学校低学年を含んだ森の学校が運営されていた。スウェーデンの森のようちえんには森の妖精ムツレが登場し、環境保護を子どもに伝える役目を果たしている。ドイツでは町のはずれにある森では多くの市民が余暇を過ごしており、どの森にも存在する高度な専門性を持つ森の管理人が子どもたちに森について語っている。財政は厳しいが、保護者ボランティアや研修生を入れて保育経営を行っている。北欧諸国は、保育系の大学は倍率が高く、保育者の社会的地位が高いようである。そ

のため高い給与が保障されており、それだけ保育の質も高いことが予想される。そして、アジアの隣国である韓国においては、昨年度から認可制度が始まっている。文化や思想において日本と共通の起源を持つ韓国の「森のようちえん」と似たような特徴を、日本の認可「森のようちえん」が持つことも予想される。その点において、韓国の動きにも注目する必要がある。鳥取県・智頭町の「森のようちえん・まるたんぼう」は、鳥取県から期限付きで補助金を得て現在運営されているが、こうした動きが今後、全国的に広がることも予想される。日本では既存の幼稚園設置基準を満たさないということで無認可であるが、森のようちえんの先進国を眺めると、魅力的なオルタナティブ（もう一つの）教育として「森のようちえん」が、日本でも永続的に認可される保育として日の目を見る日は決して遠くないのではないかと感じられる次第である。

参 考 文 献

- ① 「森のようちえんについて」及び「森のようちえんが大切にしたいこと」, 全国森のようちえんネットワーク (2008年11月16日) 発行のリーフレット (A4, 各一枚)
- ② http://www.wald-kreativ-kiga.de/?Kontakt_und_Impressum (2013年3月, Ramona Marx 作成)
- ③ Hee-Jung Chang (張) 著, 「森のようちえん」, 図書出版ホミ, 2010年。
(同書は、韓国において出版されており、まだ日本語訳は出ていない。森のようちえんに共通する運営や活動に関して一般的な面から記述した前編, ドイツ, スイス, 日本, 韓国の事例ごとに運営や活動が報告されている後編からなる。カラー写真が豊富に掲載され、活動の様子がよく分かるものとなっている。)
- ④ 内田幸一「森のようちえん指導者養成講座テキスト」(2012年12月・兵庫, 2013年2月・長野, 2013年4月・兵庫), 私製版のファイル2012年版, 2013年版。
- ⑤ 友定啓子「『森のようちえん』の保育的意義～人とかかわる力を育む視点から～」, 山口大学教育学部, 『研究論叢』, 第3部, 2012年, pp. 269-282.
- ⑥ 名須川知子ほか「『森のようちえん』 試論～北欧から学ぶわが国の幼稚園への可能性～」『兵庫教育大学研究紀要』第40巻 (2012年2月) pp. 11-17.
- ⑦ 今村光章ほか「森のようちえん」解放出版社, 2011年。
- ⑧ ペーター・ヘフナー著, 佐藤竺「ドイツの自然・森のようちえん」公人社, 2009年。
- ⑨ 「発達」(No. 96), ミネルヴァ書房, 2003年。
- ⑩ 東方万里子, 「森の幼稚園における自然と触れ合うことの意味」, 東京大学大学院新領域創成科学研究科, 2011年度修士論文。

参 考 資 料

資料1: 「ノイリード森の創造ようちえん」(文献②, Ramona Marx, より引用)

Die Initiatorin イニシエーター 私の名前は ロマナ マルクスです。既婚で9歳の一人息子の母親です。ノイリードには19年前から住んでいます。幼稚園の教師, アートセラピスト及び認定された心理学者の教育と資格を所有しています。これらの資格は Wald-Kreativ-Kindergarten をノイリードで開園するために、理想の前提条件だと思います。Wald-Kreativ-Kindergarten は2009年4月20日に創立されました。

先生チームは下記の通りです。

- ・園長 ロマナ マルクス
- ・社会教育者 (女性)
- ・社会教育者 (森の教育学の知識)
- ・幼稚園の教師

グループの大きさ

- ・3から6歳児 約20名

コンセプト Wald-Kreativ-KindergartenNeuried は、3歳から6歳の子ども約20名子供の世話と保護をし、学校へ通える準備をしています。(他の地域からの子どもも喜んでお受けします。) 全ての教育の目標と領域は、バイエルン州の教育計画に基づき、指針としています。子どもたちの健全な発育が可能です。

3つの領域“森の教育”“創造の教育”“動きを通じて習得”という、特別な顧慮がされています。

森の教育学 森は子どもにとって、パーフェクトな遊び場であり、習得の場でもあります。年間を通じての自然の中での滞在、小さなグループ内での習得事、安心できるグループは多くの感覚的な体験を与えています。この体験、経験は自然に対して感情的な関係、知覚システムの確立を子どもたちに与えるでしょう。そして、健全な身体感覚を得ることでしょう。自然科学の実験の助けをかり、子どもたちの好奇心と実例をみて、科学的な繋がり気がつくでしょう。

創造の教育学 子どもたちは、おのおのの持っている創造力を知ることでしょうし、いろいろな種類の物質を使い、何かを作り出す、多大な可能性を得ます。創造的教育は子どもたちの全ての生活分野において、励みになり、独自の考え、フィーリング、概念を表現するようになります。その際、教育者として重要な課題は子どもたちに対して、リスペクトを持つことです。私たちは子どもたちが安心できる雰囲気を作ります。子どもの創造性をまじめに受け、その結果の評価をきちんとすることです。ただ単に歌ったり、音楽やダンス、体を動かしたり、絵を描いたり、本を読んだりすることが、中心になっているわけではありません。私たちは子どもたちをほげまし、想像話や、役割ゲームや劇をしたりします。

動きを通じて習得 森の生活圏をよりよく理解するために、専門家を招待します。(レインジャー、生物学者、鳥類学者) ノイリードへの数多くのエクスカージョンとその近郊に出かけます。そこで、子どもたちはいろいろな職業を知りあい、アクティブになります。例えば

- ・庭師のように花を植える
- ・自分でピザを焼く
- ・大工のように、かなづちをつかう
- ・養蜂家のところで、ミツバチの生活を知る
- ・家畜にえさをやる、農夫のようにトラクターに乗る

遠足として、子どもたちを博物館、展示会や劇場に連れて行きます。子どもたちの想像力は動きや遠足により、刺激されます。創造的な方法論を使い、子どもたちは新しい印象を得て、独自の表現をします。年間の最大のハイライトは子どもの両親、兄弟、姉妹お爺さんお婆さんとともに行う、森の中のお祭りです。準備において、子どもたちはおのおの想像力と前喜びが得られます。

保護者とのミーティング／両親の協力 保護者とのミーティングは定期的に行われます。子どもの送り迎え時に、簡単な会話を交わします。少なくとも1年に2回は保護者と個々の話し合いを持ちます。保護者の協力は全ての森の幼稚園には欠かせないことです。多くの保護者は多くの職を通じて、アクティブに協力しています。(お祭りの準備とその実行、遠足の準備と同行、コスチュームの裁縫、テントを組み立てる、ワゴンの修理等)

Einrichtung 施設 Waaghäuschenko ゴシックな簡易な小屋

ノイリードの簡易小屋の話：1960年代に、Glückという会社が簡易小屋を作りました。この小屋で、砂利をはかり、運送することが出来ました。過去数年は、女性の彫刻家がこの小屋で仕事をしていました。2008年10月7日以来、Wald & Kreativ Kindertagesstätten Neuridのイニシエーターがこの小屋のテナントになりました。この小屋の中で子どもたちは、寒さをしのいだり、食事をしたり、クリエイティブな活動が出来ます。大きな建築用ワゴン車：小屋から約400メートル離れたところの太陽の芝に建築用ワゴンがあります。天気の良いときに、このワゴンは子どもたちを保護してくれます。

Tagesablauf 日程

- 8：00－8：30 子どもの登園
- 8：30－8：45 朝のサークル 子どもたちが輪になり、朝の歌と季節に合った歌を歌います。皆で一緒に、今日の予定を話します。(目的、天気、特別なこと、欠席した子ども等)
- 8：45－9：00 散歩(例えば Sonnenwiese まで)
子どもたちは毎日の散歩をします。季節によりかなり変更があります。子どもたちの質問の森のフローラ、ファウナ(動植物)に関することはかなり詳細に返答します。各自が自分のスピードで歩くようにさせます。グループが広がり過ぎると問題なので、待ち合わせ場所も決めてあります。
- 9：00－10：00 フリーゲーム 子どもたちからゲーム動機とアイデアを出させます。子どもたちがどうするか、ゲームのやり方を決めさせます。先生は必要な道具類を用意します。(例えば、ハンモック、ブランコ、ロープ、バケツ等です。)
- 10：00－10：30 朝食 手を洗った後、皆で朝食をとります。季節と天候により変更があります。(ピクニック用シートをひいた上で、野外にあるテーブルで、または雨や寒いときは、建築ワゴンの中で)
- 10：30－12：00 提案(週や季節により変わります。)

- ・週一回音楽教師がギターを持参し、森の中で子どもたちに音楽教育を提供します。
- ・年間テーマである“サーカス”で役割ゲームを練習します。コスチュームや背景は自分たちで作ります。
- ・子どもたちは道具の使い方（のこぎり、のみ、やすり、ドリル等）を習います。
- ・それに加えて、自然の材料及び、ペーパー、はさみ、のり、その他多くのクラフト材料（手仕事）を使い 創造工房（Waaghäusl）で手仕事をします。
- ・教師が子どもたちに動きのゲームやサークルゲームをさせます。

12:00-12:30 皆でサークルを作り、その後、Waaghäuslに戻ります。

12:30-12:45 保護者が子どもたちを迎えに来ます。（一回目）

12:45-13:15 ケーターリング会社が毎日、体に良い、暖かい食事を森の園に運んできます。全ての子どもは手を洗い、食事の準備を手伝います。格言の後、皆で食事を始めます。食後は、出迎え時間13:45-14:00又は14:45-15:00まで自由に遊ばせます。

Wichtige Fragen 重要な質問

誰が入園できますか？

ミュンヘン、ノイリードや近郊の町に（würmtalgemeinde）住む子どもで年齢は3歳から6歳を対象。発達障害、発達遅れの子も子どもたちも、喜んでお受けします。一日から数日間のテスト期間後、園のチームが受け入れられるかどうかの判断を下します。

適応期間はどのようにされていますか？

保護者の一人が入園後5日間は同行可能です。同行時間を毎日徐々に少なくすべきです。

子供たちは毎日本当に外にいるのですか？

子どもたちは外にいることを、好んでいます。天気の日、雨、雪の日もそうです。大事なものは洋服です（玉葱原理）。天気の変化に対応できるように、着せることです。

Wald-Kreativ-kindergartenは居心地良く、ヒーティングも利く建物もあり、森の中にはヒーターも備えられた建築ワゴンもあります。この中で、雨や寒いときは朝食をとります。暖かい昼食は建物の中で取ります。建物の横にはコンポストトイレがあります。

暴風の時には子どもたちはどこにいるのですか？

暴風日にはノイリードの子どもハウスのスポーツルームで過ごします。

子どもたちはどこかに行ったりしませんか？

グループが子どもたちを支え、安全を与えます。子どもたちはどこへも行きません。それに加え、多くの厳しい規則があり、何度も何度も話しているため、自動的に子どもたちは動きます。それに加えて規則として、グループが見えなくなるところまで、走り去ってはいけないというルールです。

どのように子どもを a) キツネサナダムシや b) ダニから守るのですか？

a) 他の重要な規則ですが、森にあるものは食べません。イチゴ、きのこ、ハーブ等、食事前にはきちんと水と石鹸できれいに手を洗います。汚れた手を口の中に入れさせません。

b) このテーマに入る前に、ダニの危険性は森の子どもにだけでなく、公園や牧草地、庭などにもいます。そういうわけで、私たちの子どもたちは、常に長袖のシャツとズボンを着用します。全ての保護者は敏感です。というのは、子どもが家にもどってから、森での洋服をすぐに脱がせ、洋服を振るい、ダニがいなかどうか体を探したり、除去します。ダニはかなり長い時間をかけて、住み心地の良い体の部分を探し、数時間後に、ダニが液を傷口に入れます。

玩具は本当に全くないのですか？

一般的な意味での玩具はありません。子どもたちは“遊びの材料を”森から見つけ出します。枝、石、葉、草、松かさ、土、雪。勿論、毎日子どものための遊び道具があります。その為のいろいろな材料が用意されています。音楽のリズム楽器や自分で作った楽器、創作のためには、色、刷毛、鉛筆、いろいろな紙類、童話やお話の時間はいろいろな本が用意されています。木工房で子どもたちは、かなづち、のこぎり、ペンチ、やすり、ドリル等の使い方を学び、卒業証書も与えます。

“Kuschelstunden Drinnen“ みんなと一緒にの場では、子どもたちはバズルゲーム、カードゲーム、並べゲーム、さいころゲーム等が用意されています。

小学校入学前の準備や学校入学への移行はどうですか？

今7名の子どもが学校入学前です。この子どもたちには小さなグループで特別に用意された内容で、音楽教育と木工、創作、番号覚えを使い算数を教えています。普通の幼稚園と森の幼稚園に通った子どもの能力比較研究結果でています。森の幼稚園の子どもたちが、普通の幼稚園の子どもたちに比べ、多くの領域で優っていることに、私たちにとっては別に驚くべきことではありません。多くの領域というのは、例えば、社会的行動、創造性、言語能力、動機付け、持久力、集中力、授業での協力し合うことである。ハ

イデルブルク大学での論文だけでなく (Peter Häfner の論文)。

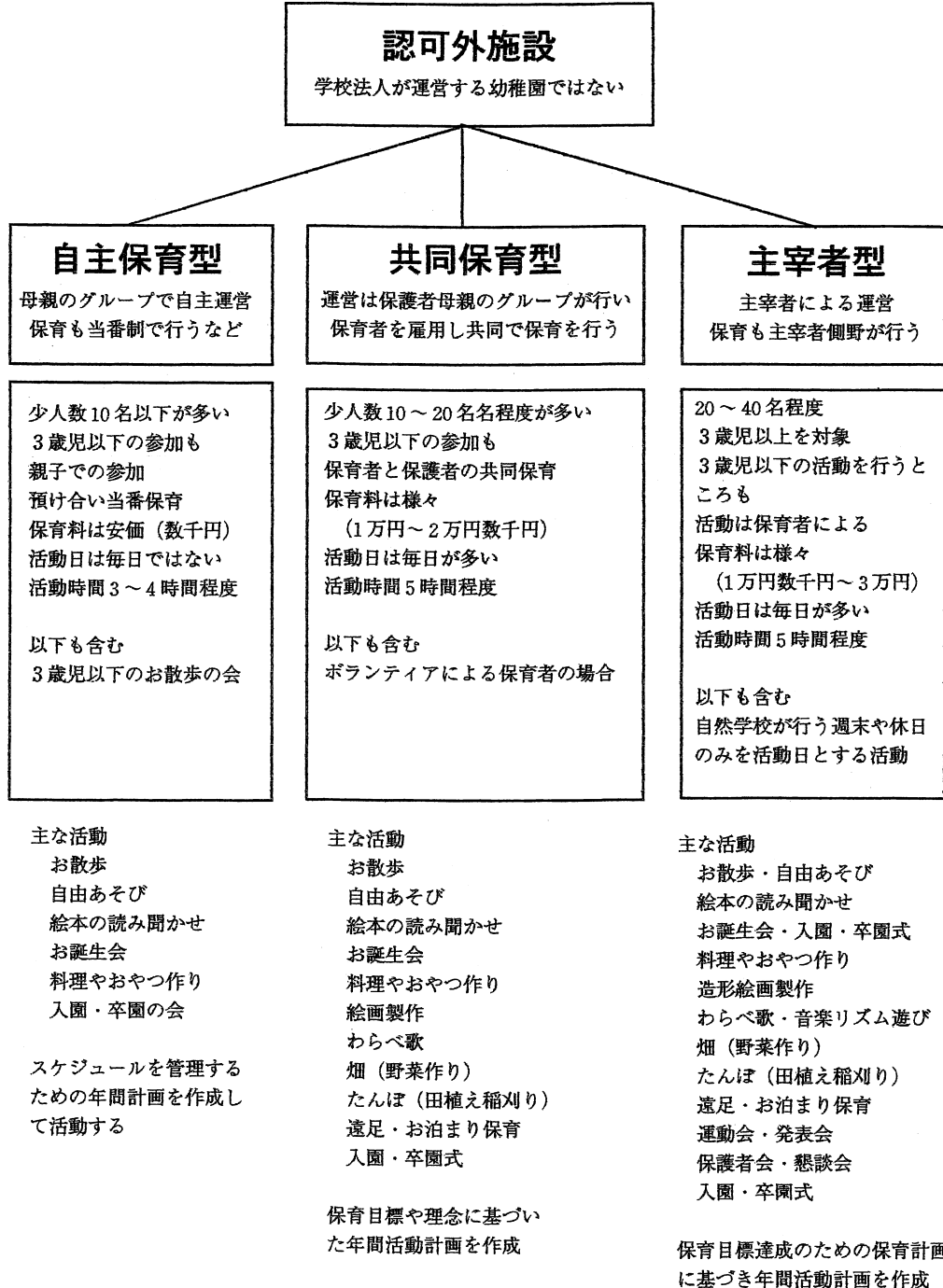


図1 日本の森のようちえんの特長(文献④, 内田幸一, より引用)

領域別に活動を検証する

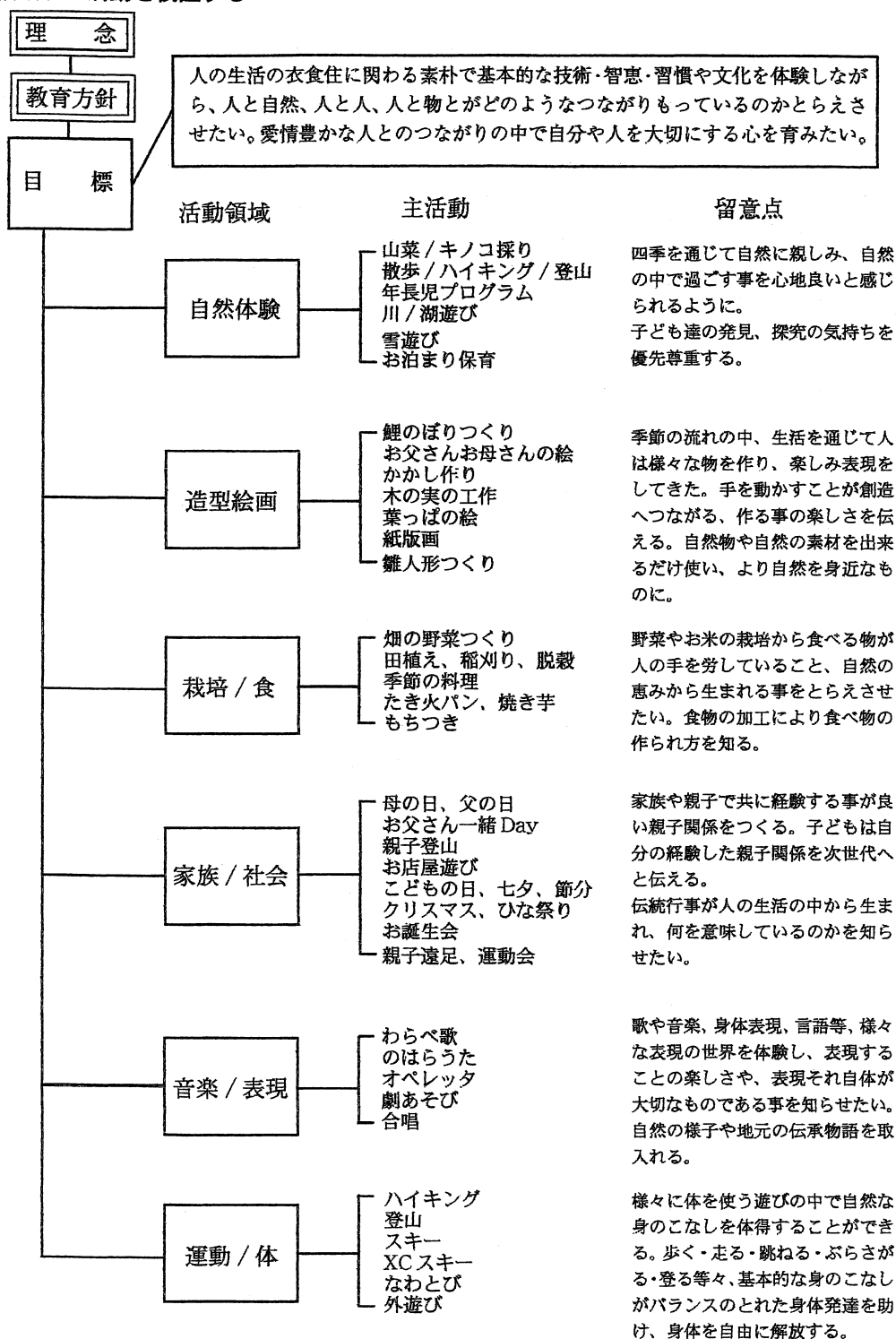


図2 子どもの森幼児教室の保育活動連携樹（文献④、内田幸一、より引用）

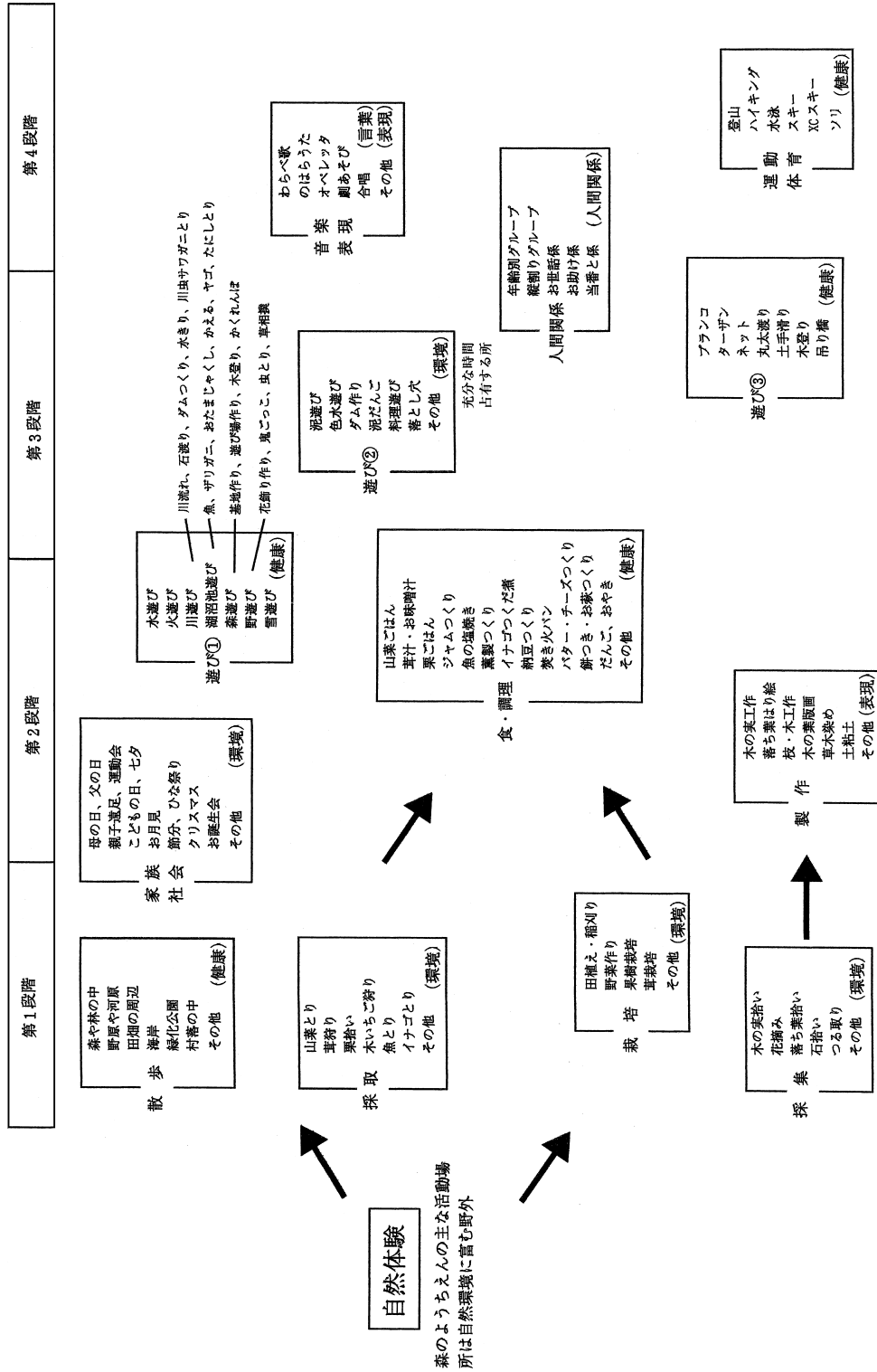


図3 森のようちえんにおける保育活動の構造的な理解 (文献④, 内田幸一, より引用)